

F. A. Wolf によるホメロスの校訂本について:『ホメロス讃歌』を中心に¹

泰田伊知朗

I. はじめに

フリードリヒ・アウグスト・ヴォルフ (1759-1824) は、その生涯で2度『ホメロス讃歌』の校訂本を出版した。それらはいずれもホメロスの校訂本のシリーズの一部である。まず第一版は、*Homeri Odyssea cum Batrachomyomachia, hymnis, ceterisque poematibus* (Halle 1784) の521-620頁に収められている (以後、「1784年版」と略記)。翌年、このシリーズの一環として『イリアス』が出版された²。第二版は、*Homeri et Homeridarum opera et reliquiae* Vol. IV (Leipzig 1807) の299-416頁に収められている (以後、「1807年版」と略記)。この『ホメロス讃歌』は『オデュッセイア』と一緒に出版されたが、それに先立ち1804年に『イリアス』が出版されている。なお、さらに先立つ1794-95年にもヴォルフはホメロスの校訂本を出版しているが³、それと併せて世に出たのが名高い *Prolegomena ad Homerum* である。

ヴォルフという同じ人が校訂した2つのエディションだが、多くの相違点を含む。筆者が数えたところ、パンクチュエーションや記号の違いを含めなくても、通常546行の『アポロン讃歌』で195箇所、580行の『ヘルメス讃歌』で202箇所、293行の『アフロディテ讃歌』で96箇所、495行の『デメテル讃歌』で162箇所、それ以外の讃歌で87箇所、計742箇所ある⁴。

こうしたたくさんの相違点は現代の校訂者を非常に困らせる。まず、どうして異なるのか、理由が一見しただけでは分からない。ヴォルフの校訂本にはコメンタリーもアパラトス・クリティクスも付いていない。さらに、このように校訂本の間で相違があると、一般的には後代のエディターが一つ一つどうして異なるのか、どちらが正しいのかと思案し、場合によっては、アパラトス・クリティクスに載せたり、コメントを付けたりしなければならない。相違点が多いほど、こうした作業はより一層大変なものとなる。

今後の校訂者の手助けとなるために、本研究では以下のことを行なう。

¹ 本論文は、2008年10月25日に日本学士院で開催された第7回フィロロギカ研究集会で行なった報告に加筆修正を施したものである。さまざまな方々から貴重なご意見を賜った。この場を借りて謝意を表したい。

各讃歌およびホメロスの作品は、以下のように略記する: 『アポロン讃歌』= *h. Ap.*, 『ヘルメス讃歌』= *h. Merc.*, 『アフロディテ讃歌』= *h. Ven.*, 『デメテル讃歌』= *h. Cer.*, 『ディオニュソス讃歌』= *h. Bacc.*, 『パーン讃歌』= *h. Pan.*, 『イリアス』= *Il.*, 『オデュッセイア』= *Od.*

² cf. F. A. Wolf, *Prolegomena to Homer 1795*, trans. A. Grafton, G. W. Most and J. E. G. Zetzel (Princeton 1985), p. 16.

³ F. A. Wolf, *Homeri et Homeridarum opera et reliquiae*, 4 Vols. (1794-95 Halle. 筆者一部未見).

⁴ その他に大きな違いとしては、1784年版は讃歌が全部で34篇なのに対し、1807年版は33篇である。これは、1784年版で第26番と27番に分割されている『ディオニュソス讃歌』が、1807年版では第26番にまとめられていることに起因する。また行数に関しても異なる。『ヘルメス讃歌』が1784年版で577行、1807年版で580行、『アフロディテ讃歌』がそれぞれ293行と294行、『デメテル讃歌』が500行と495行である。

1. 相違点を系統立てて考察し、2冊の校訂本の間には校訂上の細かい規則の違いが複数あることを示し、その規則を紹介する。こうした細かい規則に関して、特にヴォルフは解説していない。ヴォルフの一連のホメロスの校訂本の序文では触れられておらず、さらに *Prolegomena ad Homerum* でも触れていない。
2. 校訂本間の相違点のうち校訂上の規則の違いから生じたものが少なくないことを立証し、かつそうした規則の違いから生じる相違点を具体的に紹介する。これによって、今後の校訂者たちが両版の相違点を判断する際に、一つずつどちらが正しいか判断すべき相違点と、両版の規則のうちどちらが正しいか判断することによってまとめて判断できる相違点に分けることができる。
3. 上記の規則をこれまでの校訂者たち⁵がどのように扱ってきたか調べ、今日その規則の扱い方について校訂者たちの間である程度統一されている規則と、まだ統一されていない規則に分類する。これによって、今後の校訂者たちが一般的には従ったほうが無難と言える規則と、従うか否かどちらを選んでも無難とは言えないので、自らの判断で選択することがより必要とされる規則に分ける。

II. 当時の状況と校訂本の紹介

まず当時の状況を簡単に概観しておきたい。

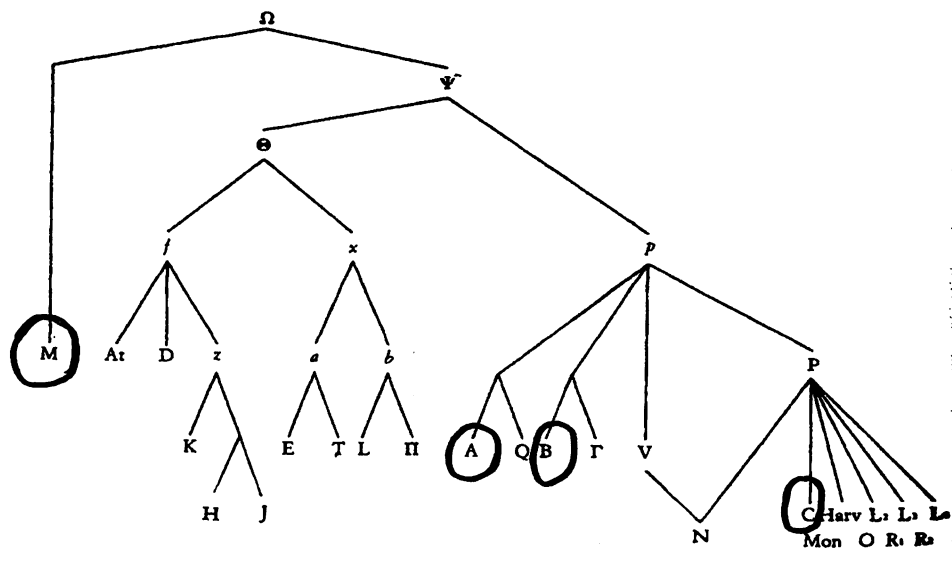
当時は『ホメロス讃歌』が頻繁に校訂されていた時代であった。ヴォルフの1784年版が出版されてから1807年版まで、1796年にイルゲン、1805年マッティアエ、1806年ヘルマンと続いた。また『ホメロス讃歌』の一つ『デメテル讃歌』に関しても、この讃歌を唯一含む写本Mが1777年に発見され、1780年と82年にルンケニウスが最初の校訂本を出版し⁶、1787年にミット

⁵本論文ではヴォルフの校訂本以外に、以下の『ホメロス讃歌』の校訂本を検証した: D. Chalcondyles, *ἡ τοῦ Ὀμήρου ποιήσεως ἅπαντα* (Editio Princeps, Florence 1488), H. Stephanus, *Poetae Graeci principes heroici carminis* (Geneve 1566), S. Clarke, *Homeri operum tomus posterior sive Odyssea, Batrachomyomachia, Hymni & Epigrammata* (Amsterdam 1743), D. Ilgen, *Hymni Homericum cum reliquis carminibus minoribus* (Halle 1796), A. Matthiae, *Homeri Hymni et Batrachomyomachia* (Leipzig 1805), G. Hermann, *Homeri Hymni et Epigrammata* (Leipzig 1806), P. Buttmann, *Homeri Odyssea cum Scholiis Veteribus Accedunt Batrachomyomachia, Hymni, Fragmenta* Vol. II (Oxford 1827), F. Franke, *Homeri hymni epigrammata fragmenta et Batrachomyomachia* (Leipzig 1828), F. M. Bothe, *Homeri carmina* Vol. VI (Leipzig 1835), A. F. Didot, *Homeri carmina et cycli epici reliquiae* (Paris 1860), A. Baumeister, *Hymni Homericum* (Leipzig 1860), E. Abel, *Homeri hymni, epigrammata, Batrachomyomachia* (Leipzig 1886), A. Gemoll, *Die homerischen Hymnen* (Leipzig 1886), A. Goodwin, *Hymni Homericum* (Oxford 1893), D. B. Monro, *Homeri opera et reliquiae* (Oxford 1896), T. W. Allen and E. E. Sikes, *The Homeric Hymns* (London 1904), T. W. Allen, *Homeri Opera* Vol. V (Oxford 1912), H. G. Evelyn-White, *Hesiod, Homeric Hymns, Epic Cycle, Homeric* 2nd ed. (Cambridge Mass. - London 1936), T. W. Allen, W. R. Halliday and E. E. Sikes, *The Homeric Hymns* 2nd ed. (Oxford 1936), J. Humbert, *Homère. Hymnes* (Paris 1936), F. Càssola, *Inni omerici* (Milan 1975), G. Zanetto, *Inni omerici* 2nd ed. (Milan 2000), M. L. West, *Homeric Hymns, Homeric Apocrypha, Lives of Homer* (Cambridge Mass. - London 2003).

⁶ D. Ruhnken, *Homeri Hymnus in Cererem* (Leiden 1780. 筆者未見), *Homeri Hymnus in Cererem* (Leiden 1782).

シェールリッヒが続いた⁷。

写本に関しては、発見された時期から考えて⁸、ヴォルフは M、A、B、C を参考にできたはずである。これらの写本の関係については、カッソラによって発表された下の系統図を参考にして欲しい⁹。なお、M は現存する写本の中でも最古のものとされている。



またこの頃から、校訂の際に写本の校合が行なわれるようになった。『ホメロス讃歌』に関して、写本 A と C を用いて初めて写本の校合を行なったのはルンケニウスである¹⁰。ヴォルフの 1784 年の校訂本は、写本の校合という手法と最重要写本 M を用いた初めての『ホメロス讃歌集』だと言える。

III. 校訂上の規則

以下では、1784 年版と 1807 年版で異なる校訂上の規則と、その具体例、および他の校訂者たちの傾向を取り上げる。さらに、ヴォルフが規則を変更した理由についてもそれぞれ考えてみたい。

⁷ C. G. Mitscherlich, *Homeri Hymnus in Cererem* (Leipzig 1787).

⁸ cf. Allen & Sikes, op. cit., p. lxxvii, Allen, Halliday & Sikes, op. cit., pp. cxiii-cxiv. なおヴォルフは 1784 年版の段階では B 写本を参照できなかったかもしれない。以下のマッティアエの記述を参照して欲しい (A. Matthiae, *Animadversiones in Hymnos Homericos cum Prolegomenis de Cujusque Consilio, Partibus Aetate* [Leipzig 1800], pp. IX-X.): 「パリの三つの写本 (筆者注: A, B, C) のうち二つ (筆者注: A, C) をルンケニウスがすでに検査していたが、コレーはこれら三つの写本を非常に注意深くまとめた。彼はパリで最も有名な医者であり、文献学者である」。コレーがいつ写本 B を精査する作業を行なったのか定かではなく、ヴォルフもこの点について述べていないので、ヴォルフが 1784 年版を校訂する際に B を見たかどうか不明である。

⁹ Càssola, op. cit., p. 612.

¹⁰ cf. Allen & Sikes, op. cit., p. lxxvii, Allen, Halliday & Sikes, op. cit., pp. cxiii-cxiv.

III-1. 1784 年版では、母音を語頭に持つ語で次の行が始まる場合のみにほぼ限って、行末で可動の *v* が挿入される。1807 年版では、行末で可動の *v* を挿入できる場合はいつでも挿入される。この違いから 114 個の相違点が派生する。

下の資料 1-1 と 1-2 の行末を参照されたい。1784 年版では可動の *v* が入るときは、ほぼ次の行は母音で始まる。逆に次の行が子音で始まるときは、可動の *v* はほぼ入らない¹¹。

1-1. 1784 『ヘルメス讃歌』15-18 行 (15-17 行目の行末に注目)

15 νυκτὸς ὀπωπῆτῆρα, πυληδόκον, ὃς τάχ' ἐμείλιν
ἀμφανέειν κλυτὰ ἔργα μετ' ἀθανάτοισι θεοῖσιν.
ἦψος γεγόνως, μέθω ἡμαῖτι ἐγκειθάριζεν,
ἐσπέριος βούε κλέψεν ἐκηβόλου Ἀπόλλωνος,

1-2. 1784 『アポロン讃歌』25-26 行 (25 行目の行末に注目)

25 ἥ ὥς σε πρῶτον Λητὼ τέκε χάριμα βροτοῖσι,
κλυθεῖσα πρὸς Κύνθου ὄρος κραναῇ ἐνὶ νήσῳ,

逆に 1807 年度版では、次の行が母音で始まっても、子音で始まっても、行の終わりの語に *v* がつくことが可能な場合は必ず、行末の語に *v* が付き、例外はない。資料 1-3 を参照されたい。

1-3 1807 『アポロン讃歌』25-26 行 (25 行目の行末に注目)

25 ἥ ὥς σε πρῶτον Λητὼ τέκε, χάριμα βροτοῖσιν,
κλυθεῖσα πρὸς Κύνθου ὄρος κραναῇ ἐνὶ νήσῳ,

1784 年前後の校訂者たちは、1784 年版とほぼ同様のやり方で可動の *v* を挿入しており、1784 年版のやり方は当時の校訂者の中では一般的だったと言

¹¹ これらの規則に対する例外は数例に過ぎない。1784 年版で、*v* が入っているのに次の行が子音で始まる例: *h. Ap.* 283, 334, *h. Merc.* 77, *h. Pan.* 44. *v* が入っていないのに、次の行が母音で始まる例: *h. Cer.* 397, 400, 474.

える。1807年版のやり方を『ホメロス讃歌』に取り入れたのは、1806年のヘルマンが最初で、このやり方は1886年のゲモルまでときどき採用されていた。その後再び1784年版のやり方が採用されていたが、2003年ウエストが1807年版のやり方を再び取り入れた。

なぜヴォルフは1807年版でこうした変更を行なったのだろうか。今見たように、1806年にヘルマンが同じやり方を採用しているが、ヴォルフはヘルマンのそれを真似したのではない。このやり方は1804年のヴォルフの『イリアス』にすでに見られる¹²。ヴォルフの変更の理由について、ウエストがヒントを与えてくれる。ウエストも同様に、トイブナー版の『イリアス』を校訂する際に、可能な限りの行でvを挿入して校訂している。その際、ウエストは次のように述べている：「プトレマイオス期のパピルスの中では、母音に接触していようと、子音に接触していようと、可動のvはだいたい行の終わりで書かれている。そして7-5世紀にかけてのイオニアとアッティカの碑文において、同じ習慣が有効だった。第6脚の短母音の後にある空白の時間を容易なやり方で満たすことをラブソードスたちがよしとしたとしても、不思議ではないだろう。どの写本の中に-eνもしくは-eと書かれているか報告することに気遣うことなく、私もいたるところでそのようにした」¹³。ヴォルフもこうしたことに気が付いて変更したのかもしれない。

III-2. 1784年版では、語尾にある短母音-eもしくは-ιが韻律上プリンケプスに位置し、単子音を語頭に持つ語が後に続き、可動のvが付いて初めて長く換算される場合、vがついていなくてもしばしば長く換算されている。1807年版では、vがついている。この違いから35個の相違点が派生する。

下の資料2-1と2-2を参照されたい。1784年版の『ヘルメス讃歌』28行目では σαῦλα ποῖν βαίνουσα、『デメテル讃歌』3行目では ἥρπαξε, δῶκε δὲ と印刷されている。

2-1. 1784 『ヘルメス讃歌』28行（通常 σαῦλα ποῖν βαίνουσα...）

σαῦλα πασι βαίνουσα. Διὸς δ' ἐριούνης υἱὸς

2-2. 1784 『デメテル讃歌』3行（通常 ἥρπαξεν, δῶκεν δὲ βαρύκτυπος...）

ἥρπαξε, δῶκε δὲ βαρύκτυπος εὐρυόπα Ζεὺς,

別の校訂本では通常vが挿入されるが、1784年版ではされていない。

このように、1784年版では、vがなくても語末の短母音-eもしくは-ιが長く換算されている例が35例ある¹⁴。こうしたケースではすべてvを挿入すれば、問題は解決できるのに、あえて1784年のヴォルフはvを挿入していない

¹² ヴォルフの1804年の『イリアス』の中で、次の行が子音で始まるのに、行末に可動のvがついている例：Il. 1. 2, 25, 48, 119, 179, etc. なおヴォルフの1794年の『イリアス』は、1784年版と同じやり方である。

¹³ M. L. West, *Homervs Ilias* Vol. I (Stuttgart and Leipzig 1998), p. XXV.

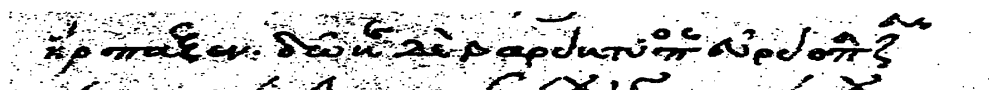
¹⁴ e. g. -ε: h. Ap. 65, 89, 445, h. Ven. 68, h. Cer. 30, etc. -ι: h. Ap. 163, 164, 460, h. Merc. 28, 84, etc.

い。1784 年以前のエディターたちはこうしたやり方をほとんどの箇所を採用しておらず、ヴォルフは先行するエディションに書かれている ν をわざわざ削除して、韻律上不自然な行を作っていると言える。

しかし逆に、1784 年版で ν が挿入されているケースも 16 例見られる¹⁵。

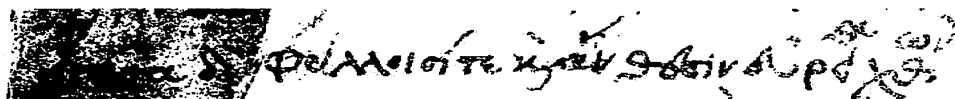
どこで ν を挿入し、どこで ν を挿入しないか、ということに関してはヴォルフの意図は不明確である¹⁶。先ほどの二つの例からも分かるように、韻律の場所や、次に来る語に左右されていない。 $-\epsilon$ や $-\iota$ の後に続く語の語頭にあるのは、二重子音として扱われる ζ やときどき二重子音として扱われる λ 、 μ 、 ν 、 ρ 、 σ ¹⁷ではない。また写本に従っているわけでもない。『デメテル讃歌』の 1784 年版のテキストと、この讃歌を唯一残している写本 M を比較してみると、それは明らかである。まず先の資料 2-2 と下の資料 2-3 を参照されたい。3 行目で $\eta\rho\alpha\xi\epsilon$ の後に M は ν を入れているのに、1784 年版では入っていない。他方、 $\delta\omega\kappa\epsilon$ の後には M も 1784 年版も ν を入っていない。

2-3. M 『デメテル讃歌』3 行 ($\eta\rho\alpha\xi\epsilon\nu.\delta\omega\kappa\epsilon\delta\epsilon\beta\alpha\rho\acute{\upsilon}\kappa\tau\upsilon\pi\omicron\varsigma...$)



さらに下の資料 2-4 と 2-5 を参照されたい。477 行目では、M は $\phi\acute{\upsilon}\lambda\lambda\omicron\iota\sigma\acute{\iota}$ の後に ν を入っていないのに、1784 年版では入れている。

2-4. M 『デメテル讃歌』477 行 ($\phi\acute{\upsilon}\lambda\lambda\omicron\iota\sigma\acute{\iota}\tau\epsilon...$)¹⁸



2-5. 1784 『デメテル讃歌』477 行 ($\phi\acute{\upsilon}\lambda\lambda\omicron\iota\sigma\acute{\iota}\nu\tau\epsilon...$)

$\pi\acute{\alpha}\sigma\alpha\delta\epsilon\phi\acute{\upsilon}\lambda\lambda\omicron\iota\sigma\acute{\iota}\nu\tau\epsilon\kappa\alpha\acute{\iota}\acute{\alpha}\nu\theta\epsilon\sigma\iota\nu\epsilon\acute{\upsilon}\rho\epsilon\iota\alpha\chi\theta\acute{\omega}\nu$

このように、M やその他の写本と 1784 年版の間にはこの問題に関して結びつきは認められない。

ヴォルフが 1784 年版でこのやり方を採用した理由は明らかではない。こ

¹⁵ e. g. $-\epsilon\nu$: *h. Ap.* 167, 383, *h. Ven.* 182, *h. Cer.* 357, 430, *h. Bacc.* 33, *h. Pan.* 41, *h.* 29. 7. $-\iota\nu$: *h. Ap.* 252, 292, *h. Merc.* 69, 317, *h. Cer.* 477, *h. Pan.* 19, 23, 27.

¹⁶ ν が挿入される 16 例のうち 13 例において、後ろに単音節の語が続いている。だが「後ろに単音節の語が続く」ことが、1784 年版で ν を挿入するか否かの基準だったとは言い切れない。実際、16 例のうち 3 例は後ろに単音節の語が続いていおらず (*h. Pan.* 19, 23, *h.* 29. 7)、また単音節の語が続いていても ν が挿入されていないケースも計 9 例見られる (*h. Ap.* 88, 89, 190, *h. Ven.* 140, 275, *h. Cer.* 3, 265, 307, 319)。

¹⁷ cf. M. L. West, "Homer's Meter," in I. Morris and B. Powell (eds.), *A New Companion to Homer* (Leiden 1997), p. 221.

¹⁸ 画像の左端が黒くなっているのは、写本 M が破損し、修復されている箇所にこの行が当たったためである。写本 M の破損については、以下を参照されたい: Allen, Halliday & Sikes, op. cit., pp. xxi-xxii, N. J. Richardson, *The Homeric Hymn to Demeter* (Oxford 1974), p. 66.

のやり方は他の校訂者たちにほとんど支持されていない¹⁹。ヴォルフ自身、1807年版ではvを入れた形を採用している。

III-3. 行末に関して、1784年版ではカンマの前のオクシュトンはその鋭アクセントをほぼ重アクセントにするが、1807年版では鋭アクセントにする。この違いから88個の相違点が派生する。

下の資料3-1と3-2を参照されたい。このように1784年版は行末でもカンマの前のオクシュトンはほぼ重アクセント²⁰、逆に1807年版は行末では必ず鋭アクセントになる²¹。

3-1. 1784 『アポロン讃歌』12行（行末のアクセントに注目）

ἐνθα καθίζουσι· χαίρει δὲ τε πότνια Λητώ,

3-2. 1807 『アポロン讃歌』12行（行末のアクセントに注目）

ἐνθα καθίζουσιν· χαίρει δὲ τε πότνια Λητώ,

1784年のやり方は当時の主流で、ヘルマンと1807年版を除けば、1860年のバウマイスターまで採用され続けた。1886年のアベルから再び1807年のやり方が採用されるようになり、今日までそれは続いている²²。

なぜヴォルフは1807年版でこの変更を行なったのか。行末でオクシュトンのアクセントを鋭アクセントにしたのはヘルマンが『ホメロス讃歌』では最初だが、ヴォルフはそれに倣ったのではない。このやり方は1794年および1804年のヴォルフの『イリアス』にすでに見られる²³。

ヴォルフはヘロディアヌスの記述を参考にしたのかもしれない。ヘロディアヌスはピリオドの前では鋭アクセントにするべきだと述べている。3. 1. 10. 3-4では「鋭アクセントが語の終わりにあるときは、もしピリオドがあとに続かなければ、絶対に文の中では重アクセントに戻される」、3. 1. 563. 9では「ピリオドが後に続く場合は、鋭アクセントを重アクセントに戻さない」と述べる。休止があるであろう行末におけるカンマをピリオドと同じようにとらえ、ヴォルフは鋭アクセントを採用したのかもしれない²⁴。またウエス

¹⁹ 1796年のイルゲンは、1784年版でvが挿入されなかった35箇所のうち12箇所、1784年版に従っている（e. g. *h. Ap.* 65, 161, *h. Merc.* 205, *h. Ven.* 68, *h. Cer.* 81, etc.）。

²⁰ 例外は数例見られるのみである：e. g. *h. Merc.* 433, 503, *h. Ven.* 72, *h. Cer.* 129。これらの例外のうち、*h. Merc.* 503を除いて全て θυμός (-όν)であることから、これらの例外は特定の語のアクセントの付け間違いに起因する可能性も考えられる。

²¹ なお行末にカンマがなければ、1784年版も1807年版も重アクセントである。

²² なおウエストだけは、行末にカンマがあろうとなかろうと鋭アクセントにする。

²³ 1794年および1804年のヴォルフの『イリアス』の中で、行末のカンマの前のオクシュトンが鋭アクセントになる例：*Il.* 1. 15, 17, 22, 193, 511, etc.

²⁴ cf. J. Vendryes, *Traite d' Accentuation Grecque* (Paris 1945), p. 237: “tout oxyton devient baryton sauf devant une ponctuation. [...] De même à la fin du vers considéré comme fin de phrase:

Λ 538 ...ἐν δὲ κυδοιμόν/ ἤκε κακὸν Δαναοῖσι, μίνυνθα δὲ χάζετο δουρός.”

トの記述も参照されたい：「行末のオクシュトン『静かにさせられるべき（筆者注：sopienda）』ではない（アクセントを戻す必要がない）。すなわち、意味の上では休止はなくても、行は休止を作っており、次の行に位置する語からその語が何も影響を受けないほど音調を分断しているのだ」²⁵。このようなことからヴォルフは行末のカンマの前で鋭アクセントを採用したのかも知れない。

III-4. 行末以外で、1784 年版はカンマの前のオクシュトンはその鋭アクセントを重アクセントにするが、1807 年版では鋭アクセントのときと重アクセントのときがある。この違いから 67 個の相違点が派生する。

1807 年版で鋭アクセントになるときと、重アクセントになるときの厳密な区別は見られない。大まかに言って、カンマの前のオクシュトンが鋭アクセントになるときは、そのカンマはやや大きな切れ目で、重アクセントになるときはそのカンマはやや小さな切れ目と言える。具体的には、カンマが文の切れ目や²⁶、関係節の前にある場合や²⁷、呼格の前後にある場合²⁸、そのカンマの前にあるオクシュトンは鋭アクセントになる場合が多い²⁹。資料 4-1、4-2、4-3 を参照されたい。

4-1. 1807 『アフロディテ讃歌』276 行（文の切れ目：θεαί のアクセントに注目）

ἄξουσίν τοι δεῦρο θεαί, δείξουσί τε παῖδα.

4-2. 1807 『アポロン讃歌』71 行（関係節の前：μή のアクセントに注目）

μή, ὅπότ' ἂν τὸ πρῶτον ἴδῃ φάος ἡλίοιο,

4-3. 1807 『アポロン讃歌』127 行（呼格の前：ἐπειδὴ のアクセントに注目）

Αὐτὰρ ἐπειδὴ, Φοῖβε, κατέβρωσ ἀμβροτον εἶδάρ,

例外もあり、例えば次の『デメテル讃歌』113 行目では呼格の前で重アクセントになっている。

4-4. 1807 『デメテル讃歌』113 行（呼格の前：ἐσσι のアクセントに注目）

Τίς; πόθεν ἐσσί; γρῆϋ, παλαιγενέων ἀνθρώπων;

²⁵ M. L. West, *Aeschylus Tragoediae* (Stuttgart and Leipzig 1998), p. XXXI.

²⁶ cf. *h. Ap.* 172, 213, 480, *h. Merc.* 154, 174, 510, *h. Ven.* 37, 111, 276, *h. Cer.* 247, etc.

²⁷ cf. *h. Ap.* 71, 327, 335, *h. Merc.* 66, 202, 508, *h. Ven.* 197, 246, *h. Cer.* 139, 162, etc.

²⁸ cf. *h. Ap.* 222, 242, 311, 479, *h. Merc.* 155, 163, 199, 492, 533, *h. Cer.* 82, etc.

²⁹ その他にも、理由は不明だが鋭アクセントになっている場所もある：e. g. *h. Ap.* 10, 41, 156, 338, *h. Merc.* 33, 104, 186, 526, *h. Cer.* 255, *h. Bacc.* 19, etc.

逆にカンマが、やや小さな切れ目と言える名詞や形容詞の並列の間や³⁰、分詞節と主節の間や³¹、形容節・修飾節の前後³²に置かれた場合、そのカンマの前に置かれたオクシュトンは重アクセントになる場合が多い³³。資料 4-5 を参照されたい。

4-5. 1807 『ヘルメス讃歌』 227 行（分詞節と主節の間、および名詞の並列の間にカンマがある例: εἰπὼν と υἱὸς のアクセントに注目）

Ὡς εἰπὼν, ἦϊξεν ἄναξ, Διὸς υἱὸς, Ἀπόλλων·

1784 年版のやり方は当時の主流で、この方法はイルゲンとマッティアエにも踏襲され、1860 年のバウマイスターまでは支持され続けた。逆に 1807 年版のやり方はヘルマンとヴォルフ以外では採用されなかった。そして 1886 年のアベル以降、カンマの前のオクシュトンはほぼ全て鋭アクセントにされるようになった。

ヴォルフが 1807 年版でこのように変更した理由は明らかではないが、重アクセントと鋭アクセントの併用は、1794 年および 1804 年のヴォルフの『イリアス』にすでに見られる³⁴。1806 年のヘルマンも同様のやり方を『ホメロス讃歌』に導入した。だが、ヘルマンとヴォルフの 1807 年版を比較してみると、一方が重アクセントを付けている場所で、他方が鋭アクセントを付けていることもあり³⁵、ヘルマンが付けたアクセントをヴォルフが 1807 年版でそのまま採用したとは言えない。

III-5. 1784 年版では、2 音節の前置詞が名詞とエピテットに囲まれるときは、前置詞のアクセントはウルティマに必ず置かれる。1807 年版では、エピテットー前置詞ー名詞の場合、前置詞のアクセントはウルティマに、名詞ー前置詞ーエピテットの場合、アクセントはパエヌルティマに置かれる。この違いから 10 個の相違点が派生する。

下の資料 5-1 と 5-2 を参照されたい。『デメテル讃歌』 28 行目ではエピテットー前置詞ー名詞という順序で語が並んでおり、この場合、1784 年版も 1807 年版もどちらも前置詞のアクセントはウルティマに置かれる。だが、『アポロン讃歌』 172 行目のように名詞ー前置詞ーエピテットという順序で語が並んでいる場合、1784 年版ではウルティマに、1807 年版ではパエヌルティマにアクセントが置かれる³⁶。

³⁰ e. g. *h. Ap.* 301, *h. Merc.* 9, 73, 180, 500, *h. Ven.* 8, 71, *h. Cer.* 1, 2, 7, etc.

³¹ e. g. *h. Ap.* 133, 233, 254, 380, *h. Merc.* 17, 24, 94, *h. Cer.* 276, *h. Bacc.* 10, 32, etc.

³² e. g. *h. Ap.* 114, 186, 483.

³³ その他にも、理由は不明だが重アクセントになっている場所もある: e. g. *h. Ap.* 448, 500, *h. Ven.* 257, *h. Cer.* 246.

³⁴ ヴォルフの 1794 年の『イリアス』で鋭アクセントの例: *Il.* 1. 10, 158, 279, 299, 401, etc. 重アクセントの例: *Il.* 1. 86, 146, 171, 275, 333, etc. 1804 年の『イリアス』で鋭アクセントの例: *Il.* 1. 10, 86, 146, 158, 225, etc. 重アクセントの例: *Il.* 1. 171, 275, 302, 333, 395, etc.

³⁵ ヘルマンが重アクセントで、ヴォルフの 1807 年版が鋭アクセントの例: *h. Ap.* 156, 222, *h. Merc.* 163. ヘルマンが鋭アクセントで、1807 年版が重アクセントの例: *h. Ap.* 500, *h. Pan.* 36.

³⁶ その他にも以下の例を参照（讃歌の番号および行数は 1807 年版に従う）: *ἐνι*; *h. Ap.* 390, *h. Cer.* 249, *h.* 5. 5, *h.* 14. 2. *κάτα*; *h. Ven.* 78, *h.* 30. 11. *πάρα*; *h. Pan.* 33, *h.* 20. 2. *ἐπὶ*; *h. Bacc.* 3.

5-1. 1784 『デメテル讃歌』28行 1807 『デメテル讃歌』28行

πολυλλίστῳ ἐνὶ νηῶ, πολυλλίστῳ ἐνὶ νηῶ,

5-2. 1784 『アポロン讃歌』172行 1807 『アポロン讃歌』172行

Χίῳ ἐνὶ παιπαλοέσῃ, Χίῳ ἐνὶ παιπαλοέσῃ

1784年のヴォルフまでは、ウルティマにアクセントが置かれることが主流だった。だが、1796年のイルゲン以来、1807年のヴォルフと同様にパエヌルティマにアクセントが置かれることが主流になり、この傾向は今日まで続いている。

1807年版でアクセントがこのように付けられるようになったのは、アリストタルコスの影響かもしれない。『オデュッセイア』のスコリアによると、アリストタルコスは名詞－前置詞－エピテットの時にアクセントをパエヌルティマに置いていた：Scholia ad Od. 6.89 ποταμόν παρὰ δινῆεντα] παρὰ Ἀρίσταρχος ἀναστρέφει, τοῖς κυριωτέροις συντάσσων τὰς προθέσεις. 「παρὰをアリストタルコスはアクセントをアナストロフェさせて書く。前置詞をより権威のあるものに結び付けている」。

III-6. 1807年版では子音の前に εἰς が置かれることはなく、必ず ἐς が置かれる。1784年版では子音の前で εἰς のときと、ἐς のときがある。この違いから16個の相違点が派生する。

1784年版に関しては、ἐς が置かれる場所と εἰς が置かれる場所は、写本やエディティオ・プリンケプス (Chalcondyles, 1488) に従っている³⁷。これが1784年当時のやり方だったが、1806年のヘルマンはほとんどの例で ἐς を採用し、1807年のヴォルフは全ての例で子音の前では ἐς を採用した。下の資料6-1と6-2を参照されたい。1784年版が写本やエディティオ・プリンケプスに従っていること、および1807年版が子音の前で ἐς を採用していることを表す例である。

6-1. 『ヘルメス讃歌』12行

M

ἀνταφύου

³⁷ 1784年版において、子音を語頭に持つ語の前で ἐς の例: h. Ap. 224, 278, 282, h. Merc. 216, 256, h. Ven. 59, 157, h. Cer. 338, 493, h. Bacc. 29, etc. εἰς の例: h. Ap. 9, 345, 470, h. Merc. 12, 34, 178, 229, 257, 355, 367, 402, 477, h. Cer. 450, h. Bacc. 48, h. Pan. 40, h. 25. 13.

Ed. Pr.

ἔστι φόως

1784

εἰς τε φόως

1807

[εἰς τε φόως

6-2. 『アポロン讃歌』 398 行
M

ἐπὶ λον

Ed. Pr.

ἰς πύλον

1784

εἰς Πύλον

1807

εἰς Πύλον

1807 年版のやり方は 1860 年ごろまで支持されたが、その後は 1784 年版と同様に εἰς と ἐς がどちらも使われるようになった。しかし、2003 年のウエストは 1807 年版と同様に、子音の前では必ず ἐς を置いている。

1807 年版で ἐς が採用された理由は、ホメロスでは基本的に子音の前では ἐς が採用されることに倣ったためであろう。たとえばスマイスは以下のように述べる：「ホメロスでは ἐς と εἰς があるが、標準的なテキストに従えば前者は後者より頻度が高い。そして通常、子音の前では ἐς である」³⁸。

III-7. 1807 年版では、定冠詞の形をした指示代名詞 + γε は必ず合成した形で印刷されるが、1784 年版では合成した形のときと、離れた形のときがある。この違いから 8 個の相違点が派生する。

下の資料 7-1 と 7-2 を参照されたい。『アポロン讃歌』 356 行目と『デメテル讃歌』 166 行目では、1784 年版が離れた形を採用しているのに対し、1807

³⁸ H. W. Smyth, *The Sounds and Inflections of the Greek Dialects: Ionic* (Oxford 1894), p. 601.

年版は合成した形を採用している³⁹。

7-1. 1784 『アポロン讃歌』 356 行

ὅς τῃ γ' ἀντιάσει

1807 『アポロン讃歌』 356 行

ὅς τῇ γ' ἀντιάσει

7-2. 1784 『デメテル讃歌』 166 行

εἰ τόν γ' ἐκθρέψαι

1807 『デメテル讃歌』 166 行

εἰ τόν γ' ἐκθρέψαι

1784 年版も合成した形を採用することにはある。資料 7-3 と 7-4 を参照されたい。

7-3. 1784 『アポロン讃歌』 107 行

ἐπεὶ τό γ' ἄκουσε

7-4. 1784 『アポロン讃歌』 316 行

αὐτὰρ ὅ γ' ἠπεδανός

1784 年版は、それまでのステファヌス、クラークのやり方をそのまま踏襲している。マッティアエとヘルマンは 1784 年版が離れた形で印刷していたもののうちいくつかを合成した形で印刷し⁴⁰、ヴォルフは 1807 年版で合成した形に全て統一した。このやり方は 1860 年のディドまでほぼ踏襲された。しかし 1860 年のバウマイスターから合成した形と離れた形が併用されるようになり、1896 年のモンローから離れた形で全て印刷されるようになった。

ヴォルフが 1807 年版でこのように変更した理由は明らかではないが、何かしらの理由で、これまでときどき離れたり合成されていた、定冠詞の形をした指示代名詞 + γε を合成した形に統一する必要があるのだろう。

³⁹ 1807 年版だけ合成した形で印刷される例: τόν γ'; *h. Cer.* 166, 221. τόν γε; *h. Cer.* 343, *h. Pan.* 16. τῇ γ'; *h. Ap.* 356. οἷ γ'; *h. Ap.* 405. τοῦ γε; *h. Cer.* 266. τό γ'; *h. Cer.* 335. 1784 年版と 1807 年版のどちらも合成した形で印刷される例 (讃歌の番号および行数は 1807 年版に従う): ὅ γε; *h. Ap.* 339, 444, *h. Merc.* 423, 576, *h. Bacc.* 28, *h. Pan.* 32, *h.* 31. 9, 15. ὅ γ'; *h. Ap.* 316, *h. Merc.* 22, *h. Ven.* 128, 216, *h. Cer.* 297, 372, *h. Pan.* 29, 30. ἥ γ'; *h. Ap.* 347, *h. Ven.* 60. τό γ'; *h. Ap.* 107.

⁴⁰ マッティアエとヘルマンが、1784 年版とは異なり、1807 年版と同様に合成した形を採用している箇所: *Matthiae; h. Ap.* 356. *Hermann; h. Ap.* 356, 405, *h. Cer.* 335, *h. Pan.* 16.

IV. その他の校訂者たちの取り扱いについて

上の III-1 から III-7 で取り上げた規則を、これまでの校訂者たちがどのように取り扱っていたか表すために、以下に一覧表にした。表の中の(84)は1784年版と、(07)は1807年版とほぼ同じやり方を採用しているという意味である。分かりやすくするために、(84)は中寄せ、(07)は右寄せにしている。※1と※2については、下の注を参照して欲しい⁴¹。

	III-1	III-2	III-3	III-4	III-5	III-6	III-7
Chalcondyles, 1488	(84)	(07)	(84)	(84)	(84)	(84)	不明 ⁴²
Stephanus, 1566	(84)	(07)	(84)	(84)	(84)	(84)	(84)
Clarke, 1743	(84)	(07)	(84)	(84)	(84)	(84)	(84)
F.A.Wolf, 1784	(84)	(84)	(84)	(84)	(84)	(84)	(84)
Ilgen, 1796	(84)	(84)	(84)	(84)	(07)	(84)	(84)
Matthiae, 1805	(84)	(07)	(84)	(84)	(07)	(84)	(84)
Hermann, 1806	(07)	(07)	(07)	(07)	(84)	(07)	(84)
F.A.Wolf, 1807	(07)	(07)	(07)	(07)	(07)	(07)	(07)
Buttmann, 1827	(07)	(07)	(84)	(84)	(07)	(07)	(07)
Franke, 1828	(07)	(07)	(84)	(84)	(07)	(07)	(84)
Bothe, 1835	(84)	(07)	(84)	(84)	(07)	(07)	(07)
Didot, 1860	(07)	(07)	(84)	(84)	(07)	(07)	(07)
Baumeister, 1860	(84)	(07)	(84)	(84)	(07)	(84)	(84)
Abel, 1886	(84)	(07)	(07)	※1	(07)	(07)	(84)
Gemoll, 1886	(07)	(07)	(07)	※1	(07)	(07)	(84)
Goodwin, 1893	(84)	(07)	(07)	※1	(07)	(84)	(84)

⁴¹ ※1: これらの校訂本の中では、行末以外で、カンマの前のオクシュトンとはほぼ全て鋭アクセントになる。※2: これらの校訂本の中では、定冠詞の形をした指示代名詞+γε は必ず離れた形で印刷される。

⁴² エディティオ・プリンケプス (Chalcondyles, 1488) の中の分かち書きは、明確ではない。

Monro, 1896	(84)	(07)	(07)※1	(07)	(84)	※2
Allen & Sikes, 1904	(84)	(07)	(07)※1	(07)	(84)	※2
Allen, 1912	(84)	(07)	(07)※1	(07)	(84)	※2
Evelyn-White, 1936	(84)	(07)	(07)※1	(07)	(07)	※2
AHS., 1936	(84)	(07)	(07)※1	(07)	(84)	※2
Humbert, 1936	(84)	(07)	(07)※1	(07)	(84)	※2
Càssola, 1975	(84)	(07)	(07)※1	(07)	(84)	※2
Zanetto, 2000	(84)	(07)	(07)※1	(07)	(84)	※2
West, 2003	(07)	(07)	(07)※1	(07)	(07)	※2

V. 結論

結論として言えるのは、742 個の相違点のうち、338 個が上記の校訂上の規則に基づく相違点だということである。またこれらの規則のうち、III-1 と III-6 で取り上げた規則に関しては、20 世紀以降においても校訂者たちの見解が定まっていない。今後の校訂者たちは、特にこれらの規則に関してはどの規則を採用するか自ら決定し、一貫した姿勢で校訂作業に取り組まなければならないであろう。

(台湾 義守大學)